



広島大学COC 中山間地域・島しょ部領域 第2回円卓フォーラム

2015年7月22日





説明の内容

1. 円卓フォーラムの趣旨説明

教授 山尾政博

2. 体験学習2年間の活動の成果 — 学生は体験学習をどう評価しているか —

「地(知)の拠点」特任助教 天野通子

3. 体験学習から地域志向型教育への発展

准教授 細野賢治

活動を振り返って

- 学部教育における地域体験の成果
体験学習、特別講義、フィールド実習、インターンシップ
との相乗効果が現れ始める
- 地域・自治体関係者からの支援と激励

地域志向型教育の進め方に関するノウハウの蓄積、改善

大きな成果は・・・

学生に共有、移転される体験と知識

- 1) 地域交流を体験をした学生が後輩や周辺の学生に伝達
- 2) 教務補助(TA)経験などを通して、地域課題に対する
認識を深める

地域志向型教育
のパッケージ化

第1回円卓フォーラムで提起した、
学生に共有される経験と知

実現にむけて動き始めた

担当教員・
助教

実践と改善

コーディネーターが体験の場を設定、
助教・担当教員が連携し問題発見の
手助け

TA学生

TA学生

学生による問題
発見と知の蓄積

専門的な地域調査・
体験の成果

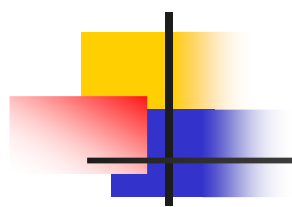
学生

地方創生に対する認識の深まり

- 連携特別講義を通じた地域課題に関する問題関心の広がり
- 2年間の活動が地域に与えたインパクト
インターンシップ、ボランティア、地域課題の研究への期待
- 地方創生活動との相乗効果への期待

円卓フォーラム 第2部で話し合う点

- 1 学生と教員は、地域志向型教育をどう評価しているか？
- 2 連携地域からみた地域志向型教育、地域課題研究のあり方とは？
- 3 連携地域が求める、地方創生活動に結び付く大学の貢献とは？



2. 体験学習2年間の活動の成果
—学生は体験学習をどう評価しているか—

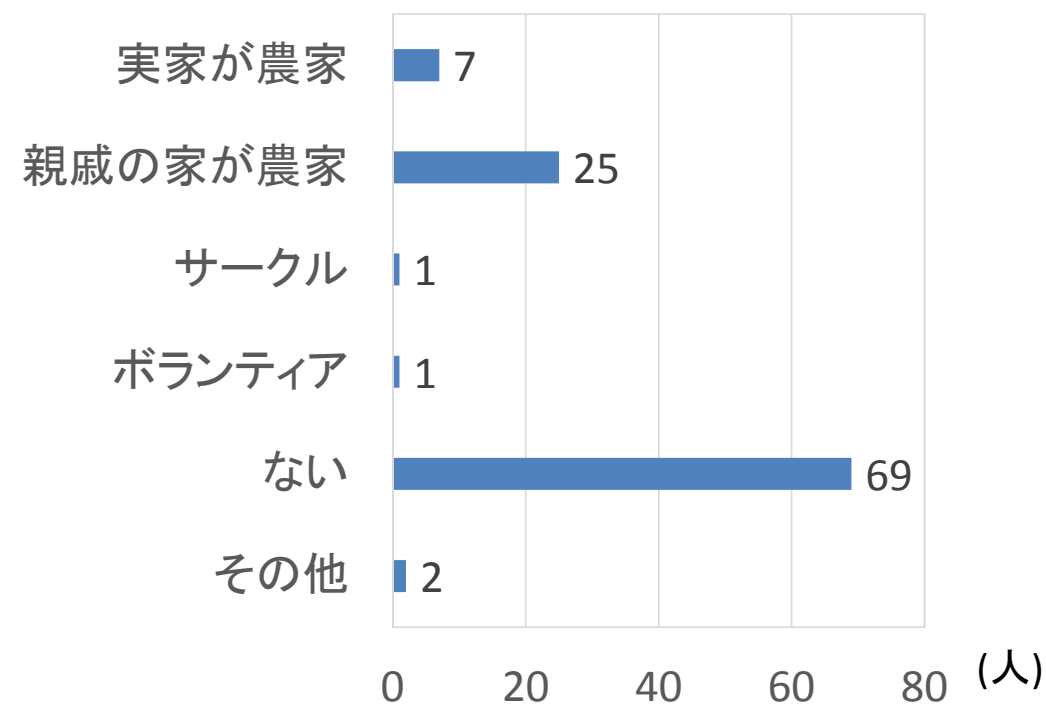
天野通子

今年度、参加した学生について

◇1年生

- 参加人数 104名(男性54名、女性50名)

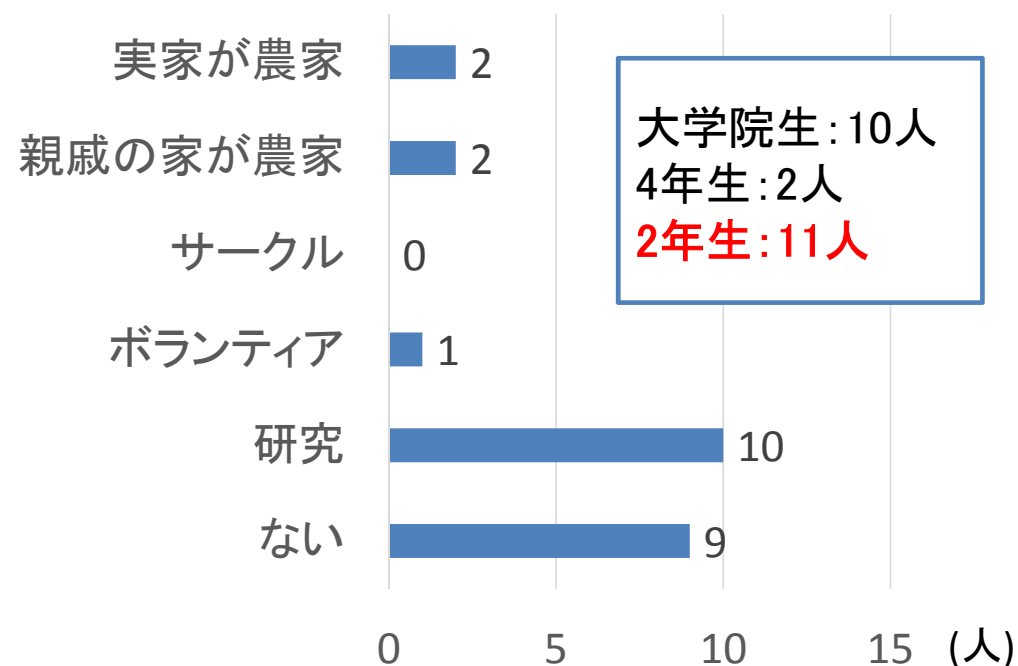
授業以外で農林漁業と関わりがあるか(1年生)
(*複数回答)



◇ティーチング・アシスタント(TA)

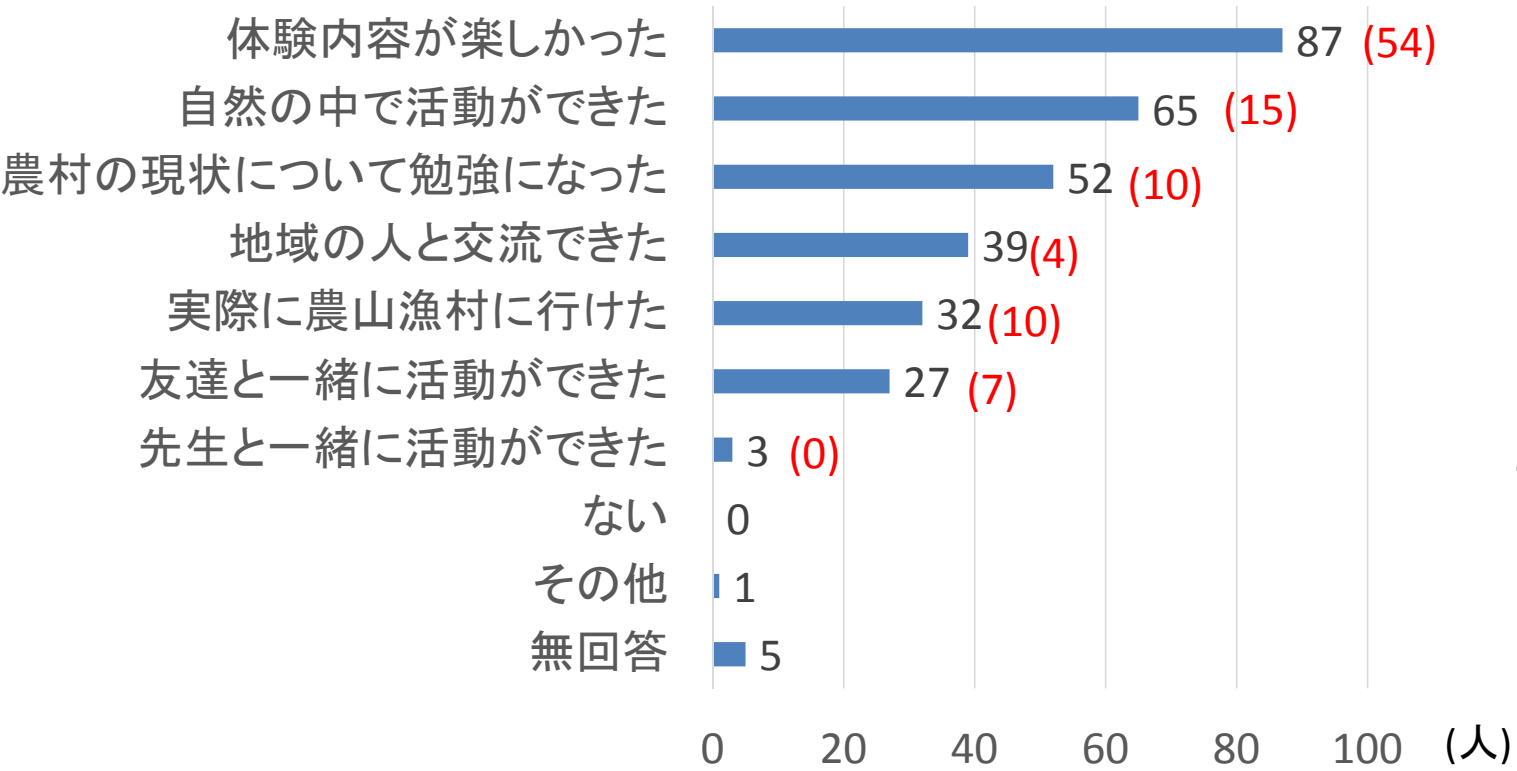
- 参加人数 23名(男性9名、女性14名)

授業以外で農林漁業と関わりがあるか(TA)
(*複数回答)



今年度も1年生に高評だった体験学習

今回の体験学習でよかったこと(1年生)
(*複数回答)

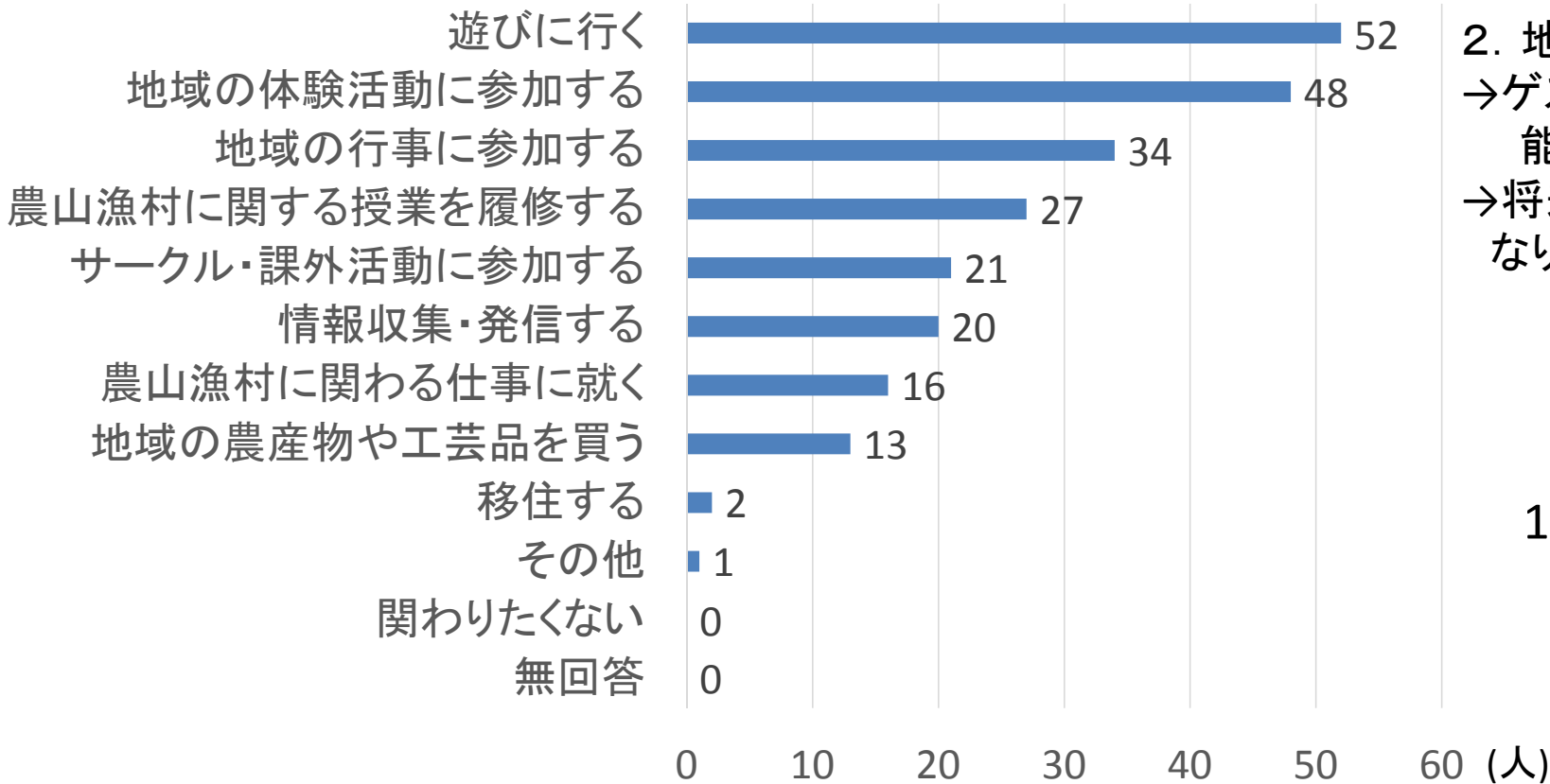


* ()内は、うち最も良かったと回答した人数

- 1. 体験学習全体の評価
とても良かった、良かったが96%
- 2. 事前学習について
十分、適当であるが80%
- 3. 体験学習で悪かった点
「ない」が50%
→「ある」のうち35%は積極的意見
- 4. 学習を通じた地域への印象変化
→60%の学生が良い方向に変化
(印象が悪くなったのは2名のみ)

1年生が地域との関わりを求める

今後、地域とどのように関わりたいか(*複数回答)



1. 訪れた地域にまた行きたいか
→ぜひ行きたい 46%
機会があれば 43%

2. 地域との関わり方
→ゲストとして地域とのつながりを
能動的に求めている
→将来、地域の側(ホスト)に
なりたい学生もいる(17%)



1年生への体験学習が
地域志向型教育の
動機付けを果たした

体験学習をサポートしたTAの感想

参加したことに対する感想

新しい体験が色々できた
体験が楽しかった
地域の人との交流が楽しかった

活動から学んだこと

農作業の大変さ、難しさ
生産者がもつ知識の豊富さ
生産者の技術の高さ
地域づくり、活性化の取組
地域がもつ力強さ
地域維持の大変さ

学生の能動的意欲

- ・学習意欲
他の地域の状況も知りたい
もっと農漁業について学びたい
研究に生かしたい
- ・地域活動への意欲
収穫に行きたい
地域の活動に参加したい
- ・体験学習の改善意欲
余裕のあるスケジュール
学生、地域の人との関係強化
昼食時間の使い方

◇体験学習や課外授業などで地域に出る機会を重ねているTAは、
地域や農漁業に対する興味を深めている

◇上級生TAと2年生TA、そして1年生との縦のつながりができ始めている

まとめ

1. 昨年に引き続き、1年生は体験学習を通じて、地域への興味、関心を深めるきっかけを得ることができた
2. 2年生はTAを通じて、地域との接点をより深めることができている
3. 下級生から上級生へ成長する過程で、地域への関心が深まり、
学生が地域を自分の活動や研究対象としてのフィールドに位置づけている
4. 上級生から下級生の縦のつながりができ始めたことは、
地域と学生、大学の継続的な関係構築へ可能性が強まった



3. 体験学習から地域志向型教育への発展

細野賢治

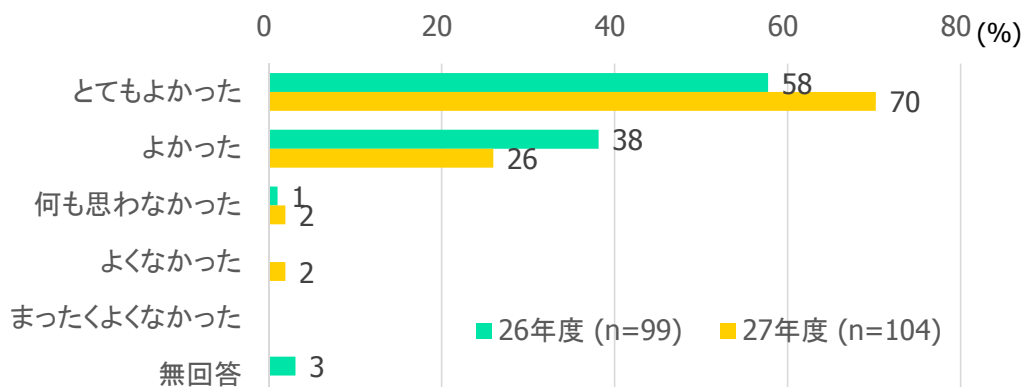


報告内容

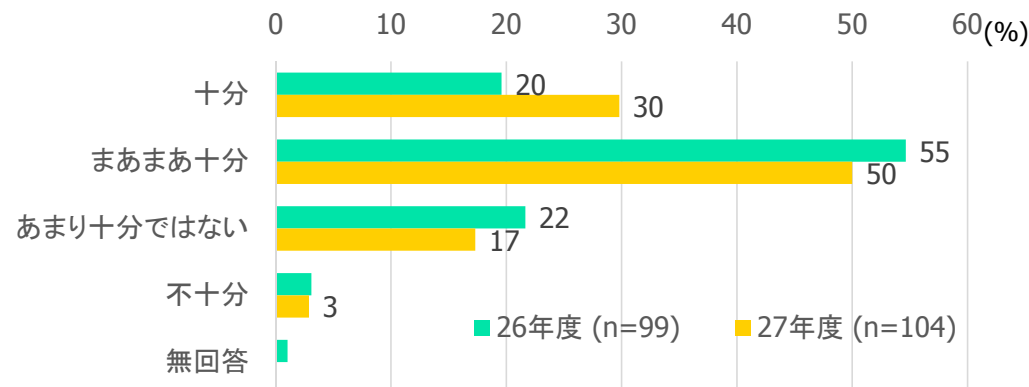
- (1) 教養ゼミ体験学習に関する学生の自己評価
- (2) 担当教員による教養ゼミ体験学習の教育効果に関する評価
- (3) 平成26年度入学生の2年次における修学意欲の変化
- (4) 「地域志向型教育」に向けた今後の展開と課題

(1) 教養ゼミ体験学習に関する学生の自己評価

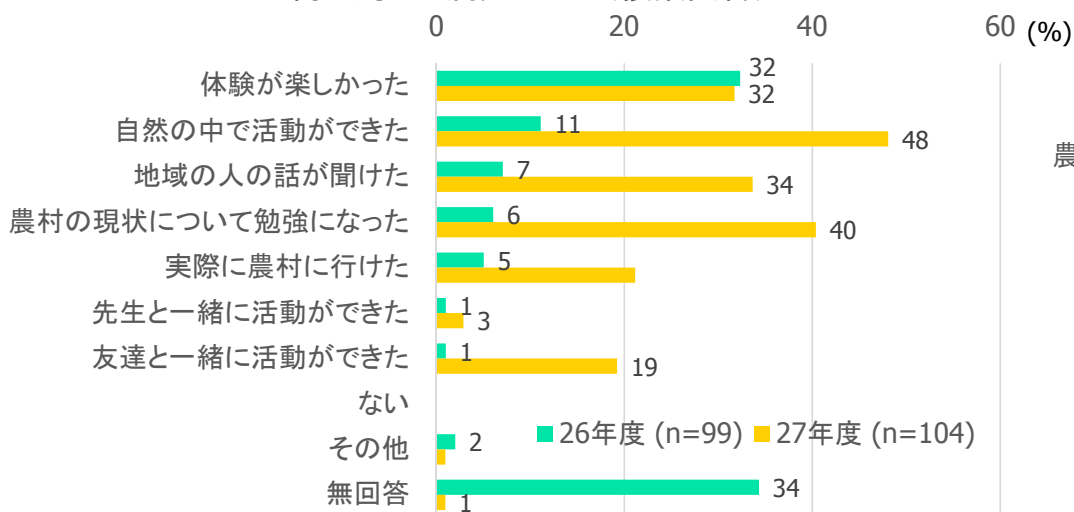
体験学習の感想



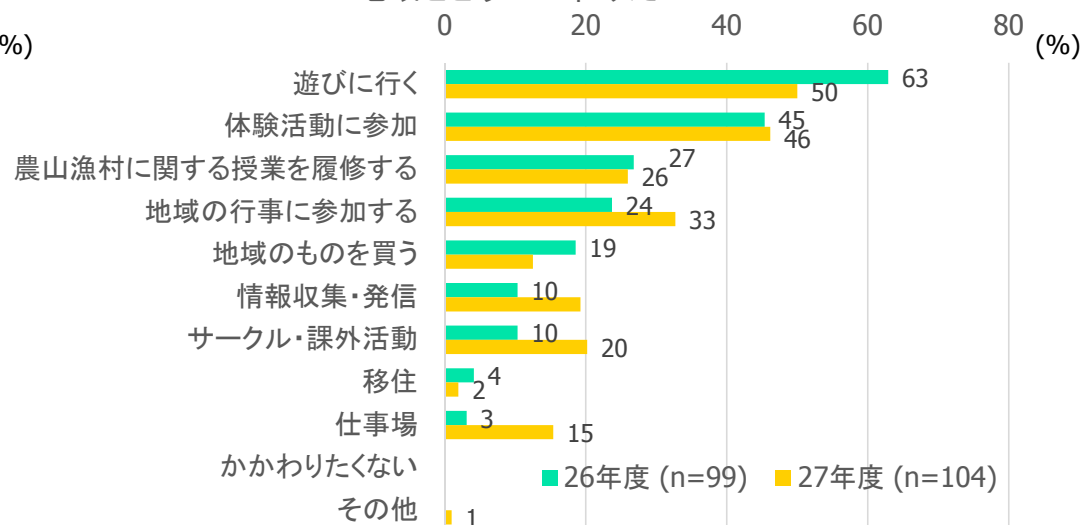
事前学習は十分だったか



何に対して満足したか(複数回答)



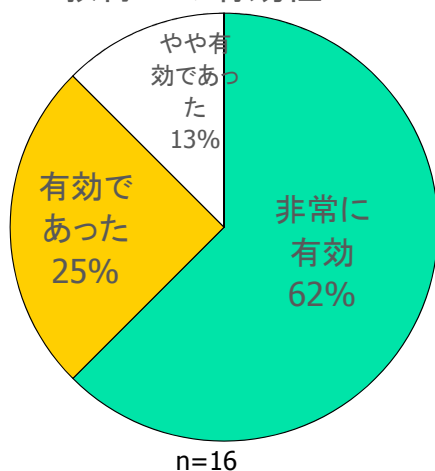
地域とどうかかわりたいか



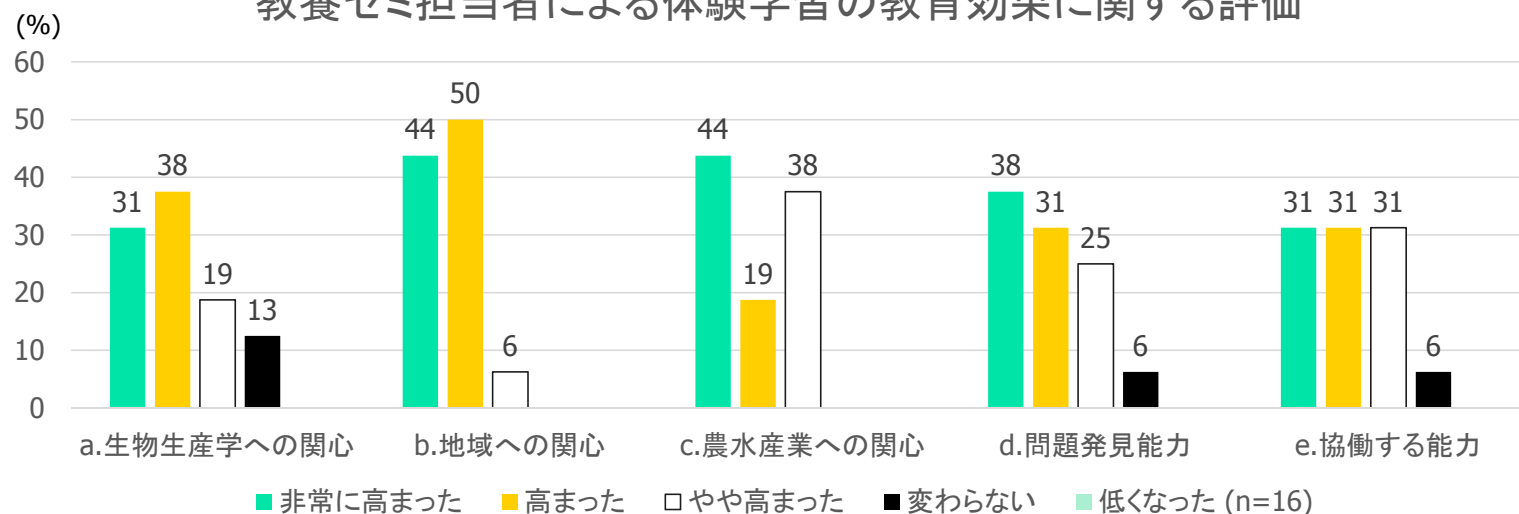
(2) 担当教員による

教養ゼミ体験学習の教育効果に関する評価

体験学習の導入による
教育への有効性



教養ゼミ担当者による体験学習の教育効果に関する評価



体験学習やインターンシップなどCOCの活動における教育効果

問題解決型の学習に適している▼地域の創意工夫の姿を間近で見られたことはプラスであろう▼自分の住んでいる周辺だけでなく、少し離れた山間部や島しょ部にどのような団体がどのような活動を行っているのかを、実際の体験学習を通じて知ったことは大きな経験になると思う▼体験は知識以外の力となるので、将来にどのような進路に行っても、この経験を活かして実践から課題を考える力につながると思います▼地域やグローバル社会を問わず、課題解決能力の向上につながる▼事前学習を通じて地域の様々な課題を見出し、発表の準備などで、学生自ら主体的にその問題を解決する方法などを積極的に議論していることから、教養ゼミでの体験学習は、主体的に考え問題を解決する能力を高めるのに効果があると思います▼具体的な事例に触れることで問題意識をもつきっかけになると思います▼まだ入学したばかりであり、2セメスター以降の活動に期待したい▼実際に”体験する”ということはとても大事なことであると思います。これにより、一部の(資質ある)学生は、より成長すると思います。▼今年の2年生は、自ら考え行動する学生が多いように思われる。体験学習の効果もその要因の一つではないか。

(3) 平成26年度入学生の2年次における 修学意欲の変化

- ① 教養ゼミ体験学習への教務補佐員としての参加
 - 2年生11人が参加し、うち8人は複数回参加。
- ② 中山間地域・島しょ部連携特別講座での受講状況
 - 受講生19人中、13人が2年生。
- ③ 中山間地域・島しょ部連携インターンシップの受講状況
 - インターンシップ参加予定30人中、15人が2年生。
- ④ その他
 - 2年生の一部がコース選択に当たって自主的に研究室を訪問。

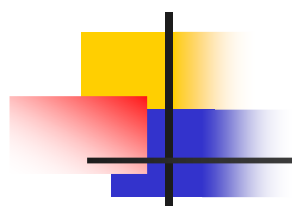


- ・(地域課題だけでなく生物生産学全体において)問題意識と修学意欲が向上している。
- ・学習や研究にかかる自主性が向上している。

(4)「地域志向型教育」に向けた今後の展開と課題

- ① フィールドワーク特別演習への誘導
 - 26年度:受講生5人→27年度:受講生10人を目標に
- ② 地域との協働による学生の自主活動への誘導
 - 26年度:大長櫓祭り、世羅高×広大コラボワークショップ
 - 27年度(予定):大長櫓祭り、井仁地区みまもり企画、大崎上島町都市農村交流
- ③ 卒業論文における地域志向型テーマの設定
 - 26年度:22テーマ→27年度:前年度以上を目標に
- ④ その他
 - ホーム・カミング・デイや学部公開など大学行事のなかに地域とのコラボ企画を位置づけ。
 - 地域・地方行政の企画に学生・教員が積極的に参加。

基本は「地域と大学の双方が
関係性をより深めながらメ
リットを共有」を軸に展開



4. 地域と大学への提案 —COCコーディネータの視点—

大泉賢吾

地(知の)の拠点への地域の期待と連携の意義

域学連携からの発想: 大学生と大学教員が地域の現場に入り、地域の住民やNPO等とともに、地域の課題解決や地域づくりに継続的に取り組み、地域の活性化や人材育成に資する活動。

地域のメリット: 大学に集積する知識や情報やノウハウが活かされる、地域で不足する若い人材力を活用、地域の活性化

大学のメリット: ・学生や地域住民の人材育成、実践の場が得られる、教育・研究活動へのフィードバック

短期的成果への期待・声

- ・地域イベントや地域活動などへの参加者を増やしたい。
- ・学生の若さ・活力で地域に刺激を与えて欲しい。
- ・地域づくり・製品開発に学生の発想を生かしたい。
- ・地域課題の調査研究で解決の糸口を見つけない。

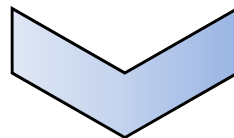
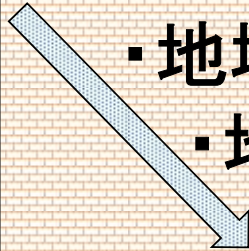


地(知の)の拠点への地域の期待と連携の意義



中長期的
成果への期待

- ・地域を理解し、地域に役立つ人材を育てたい
- ・地域を応援・支援してくれる人材を育てたい
- ・地域の中核として活躍する人材を育てたい
- ・地方創生を牽引する地域人材を育てたい



域学連携よりも意識が高い
メリットで説明できない地域への深い思い

・地域が、大学生、教職員、大学を育む

市町・地域の中に大学との交流・連携をどう位置づけるか

どんな地域の姿が目標なのかを共有する

—量か質か、物か人か、短期か中長期かの優先度は！—

地域・市町と学生・大学の 質の高い
組織的交流連携から成長につなげる



持続的な地方創生と成長

学生・若者が地域社会の支援で成長し
地域はその人材で持続的成長を遂げる

地方創生の人材育成へのステップ



学生(人)が自立的に
地域と取り組む
地域の創生

大学が地域と
組織的に取り組む
人と地域の創生

自治体・地域の
目標を
大学と学生も共有

